

東大演習林の森づくりと銘木市 森林学習プログラム

投稿者：

Posted on : 2020-3-1 6:30:00

2月29日の北海道新聞で富良野市にある東京大学北海道演習林の取り組みが紹介されました。この記事には富良野市博物館の取り組む森林学習プログラム（東大演習林をフィールドとして富良野市内の小中学生が森林の生態や森づくりを学ぶプログラム・研修を積んだ森林学習サポーターが指導する）とも深い関係のある内容を含んでいます。



クリックすると全体が見れます。

昨年1月の森林学習サポーター研修会で私たちも同演習林の井口職員の案内のもとで銘木市を見学しました（末尾の「ふらの森の教室だよりNo.18」もご参照ください）。研修会は年間を通じて何度も開催しており、それまでは東大演習林の教員・職員から現地の森林の生態系やその森づくりのやり方を学ぶことが多いのですが、このときは切り出した木材がどうなるかという、普段の学習の先にあることを学ぶ内容でした。独特の熱気にあふれた会場の中、やはり私たちも東大演習林のマカバがとびぬけて高い値をつけていたのに、驚かされました。



この新聞記事ではマカバの売り上げが演習林の財政を支えていることに注目していますが、長年にわたる森づくりにかけた費用や人手、研究がこれを生み出したことは忘れてはいけません。費用対効果を考えれば、より短期的なスパンで植樹と皆伐を中心とした施業の方が成立しやすく、研究林としての側面があるからこそ、人手をかけた施業形態が（かろうじて）成立しているのでしょう。



さらに注目すべきことは、こういった施業が持続的な森林管理につながると共に、豊かな生態系の維持にも貢献していることです。施業方法をごく簡単に説明すると以下ようになります。

- ・演習林全体を「林分」という区に分ける。
 - ・その年の施業することになっている区で、病気の木や大径木を切り出し、若木の成長を促進する。その基準は次のその区を施業する年（15～20年後）には老齢で材としての価値が落ちているかどうか。（反対にいうと、材として最も価値があるタイミングで切り出す）
 - ・中には一斉に皆伐して笹などを払った上で植林する区や、ほぼ手を付けない「保存林」とする区、それ以外の区も施業の間隔を15年・20年など森の状態に合わせて施業方針を設定する。更新方法も場所により、天然更新や植林、地がきの有無を使い分ける。
- こういった取り組みの結果、持続的な森林が成立すると共に、多様な動植物が生息・生育するいわゆる「自然豊かな森」ができています。



基本的に東大演習林は一般の方の入林を制限してきましたが、これだけの森林の価値とその管理の難しさ（過去何度も甚大な被害を受けた山火事なども含む）を考えればもっともだと思えます。それらの経緯を乗り越えて、現在「森林学習プログラム」への協力という形で、私有地である演習林の市民への開放を進めて進めていただいていることに感謝の念を禁じえません。

冒頭にお伝えしたように、マカバの値段は高いとはいえ、かけた労力からみれば決して大きなものではありませんが、それ以上に富良野の持続的で多様な動植物が生息する森に対する熱意なのだと思います。地域の住人の皆さんには、そんな森がこの地域にあることをぜひ誇ってほしいと思います。

森林学習プログラム推進事業
ふらの森の教室だより
No.16

【森林学習サーター研修会 in 旭川】

北海道森林学院が1月31日（水）に行われました、「旭川」に於ける今回の研修会。毎年東大演習林の樹木が枯死されるため、関係者の関心も非常に高く、後述演習林の竹も多数訪れていました。演習林職員の間口和也技術専門員に案内頂きながら、道産木材の採取や演習林から採り出された木材の採取など実地研修を行いました。演習林には同じ種類の樹木が密集していることが多く、この後見学した見本の樹には、異なる種類の樹木が混在している様子も目の当たりにすることが出来ました。演習林の採種の適性を教育の上からも再確認できたことは貴重な体験となりました。



旭川の雪原まで研修会を行いました。

これまでとは全く違った角度で樹木に接しておりましたが、人の暮らしから始っても適切な樹種がない木材の存在をあらためて認識することが出来た一日となりました。

今年も、また新たな視点で自ら樹木と親しむことが出来そうです。

次に、大小30社ほどの家具メーカーの家具倉庫中心に展示・販売している施設「旭川デザインセンター」で、木材がどのように加工し、利用されているのか学ぶために見学させて頂きました。旭川家具の歴史や現状、最新のデザインの家具デザイナーの原島さんが分かりやすく説明してくれました。



旭川デザインセンターの研修会。

【第2回樹木学習会 in 奥沼会堂】

冬季の恒例の樹木学習会は2月6日（水）に奥沼会堂で行いました。私たちが活動する奥沼の多い神社山は、その名の通り山地の林ですが、奥沼会堂は湿り地林が多く分布するため、樹種も様々で珍しい。奥沼に生える樹木を中心に学習することが出来るエリアです。

奥沼は利用できない樹種の多い樹種整備のため、今回はこの奥沼にこだわったので、自然と小笠原さんを中心に勉強が始まりました。

樹種が異なる樹種を特定したい時、樹木に葉が落ちていない時期であれば、ある程度判別しやすいのですが、冬期は葉と木の幹が落ちてしまっているため、やや区別が難しい樹種や葉、枝の形から特定しなければなりません。また、樹木の年代やその木が枯ってしまった場所等により、同じ樹種でも特徴が異なる場合もありますので、特定するまでに皆さん四百円首する経験もありますが、まあ大丈夫、この時期に行われる学習会の醍醐味とも思えます。

小笠原さんが「この木は何ですか？」とサトーさんに聞いて、またはサトーさんの声から「この木は何ですか？」と質問し、そんな掛け合いを繰り返して奥沼の林の中を巡っていました。

今回の学習会に取材されていた北海道新聞の記者は、取材の合間に、我々と一緒に学習していました。途中で「奥沼の木の体の断面でみるようになりましてよ！」と嬉しそう



奥沼の奥沼の奥沼の奥沼。

な質問を浴びていました。

今回の研修会は2月6日（水）です。ハイランドの研修のサトーさんの森で行います。さてさて、奥沼はどれくらい知られていますでしょうか？



奥沼の奥沼の奥沼の奥沼。